

ぐんまの利根川に遡上する天然アユ（東京湾から遡上する天然アユを考える）

日本一のアユを取戻す会 福田睦夫

はじめに

東京湾に流れ込む大きな河川でアユの遡上量が調査されている河川は、多摩川、荒川である。一方、江戸川では直接調査をされていないが、利根川（利根大堰地点）で調査されている。今回、三河川のアユの遡上傾向を比較し、利根川（江戸川）における問題点を考える。

1. 調査に利用するデータ

多摩川における遡上量：東京都の調査値または図より読取り

荒川：秋ヶ瀬堰地点、独立行政法人“水資源機構”のよる調査値

利根川（江戸川）：利根大堰地点、独立行政法人“水資源機構”のよる調査値

調査に利用した資料は次表のとおりであり、河川によって調査年次、調査期間等が異なっている。

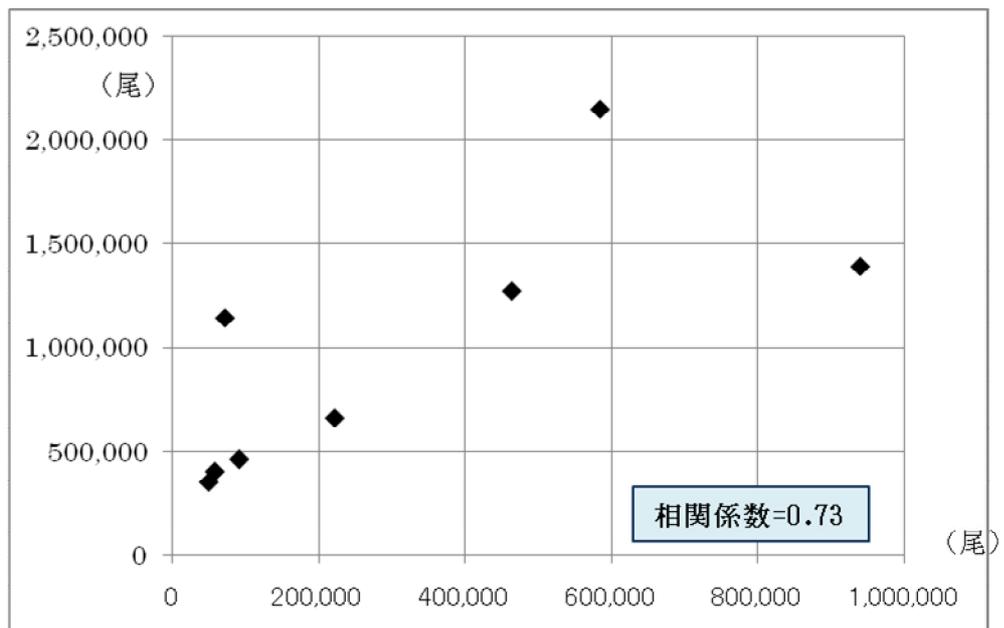
東京湾流入河川のアユ遡上データ（単位：尾）

	利根川	荒川	多摩川	摘要
	利根大堰	秋ヶ瀬堰	調布堰	
S58			180,000	
S59			230,000	
S60			20,000	
S61			20,000	
S62			30,000	
S63			80,000	
H1			60,000	
H2	102,434		500,000	
H3	100,490		200,000	
H4	113,523		910,000	
H5	214,653		1,310,000	
H6	56,922		800,000	
H7	590,371		800,000	
H8	190,062		280,000	
H9	183,772		170,000	
H10	126,136		230,000	
H11	215,992		570,000	
H12	527,587		580,000	
H13		90,623	460,000	
H14		71,161	1,140,000	
H15		221,107	658,070	
H16		48,962	349,540	
H17	191,502	57,310	401,588	
H18	1,241,596	463,145	1,270,090	
H19	408,905	583,772	2,146,090	
H20	317,300	939,382	1,390,000	

2. 遡上傾向について

調査年ごとのデータが揃っている、「荒川と多摩川」、「利根川と多摩川」について遡上傾向を整理し、関係があるかをピアソンの相関係数により見る。

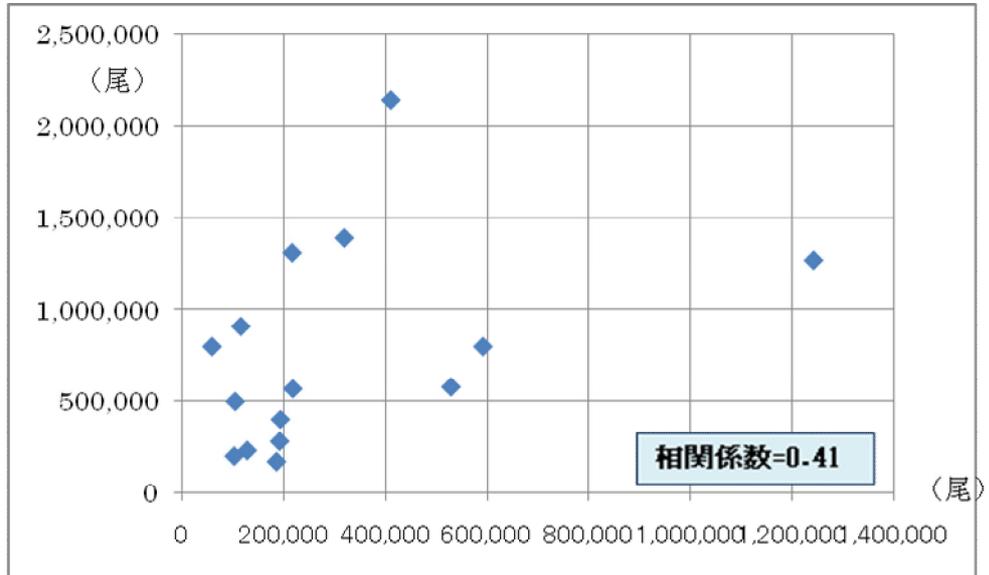
(1) 「荒川と多摩川」



縦軸：多摩川、横軸：荒川

相関係数が 0.73 と高く、明らかに荒川の遡上量と多摩川の遡上量には強い関係が見られる。

(2) 「利根川と多摩川」



縦軸：多摩川、横軸：利根川

相関係数が 0.41 と低く、利根川と多摩川の遡上量の関係は少ない。

3. 私論

各河川で孵化した仔魚が東京湾内で生育し春に河川に遡上する。アユはサケのように母川回帰を行わないとされていること、江戸川、荒川、多摩川の河口における距離は、それぞれ 10km、15km と近いことより、どの河川にも同じような傾向で、遡上しておかしくない。

利根川の遡上傾向が、多摩川や荒川と大きな違いがあるようだ。

次に、遡上数の絶対数を見ても、多摩川が 100 万尾単位、荒川でも近年増加傾向で 100 万尾に迫る勢いなのに対して、利根川は平成 18 年を除き 10 万から 50 万尾と少ない傾向にある。

利根川の遡上量の少ない原因は生き物の動向であり、簡単には推論出来ないが、平成 18 年が春の河川流量が極めて多い年であったことを重要視したい。江戸川河口の水閘門は、河川流量が一定以上である条件では、開くため遡上障害とならない。平成 18 年は、水閘門が開いていた時間が例年に比べ非常に多かったため、利根川(江戸川)の遡上量に大きく寄与したのではないか？

江戸川水閘門では、多摩川や荒川に負けないよう、河川管理者が現地でアユの遡上実験等を行い、対策案を検討している。一年でも早く、十分な稚アユの遡上成果を期待したい。

平成 21 年 9 月

(日本一のアユを取戻す会 福田睦夫)